

趣味の化石採取

藤島泰隆

動機

化石の知識は、実習あるいは試験の際に示準化石を暗記し、その場しのぎで過ごしていたが、石炭会社に就職したところ、四六時中、化石とにらめっこ、化石名の同定（植物・貝類・甲殻類・棘皮動物・魚類等）の明け暮れであったため、入社以来、5年近く化石を趣味で集めてみようなどとは、ついぞ思い及ばなかった。

石炭業界の景気が、黒ダイヤともてはやされた時代より、エネルギー革命で落ち目になり始めたころ、広島市の小学5年生からのハガキが回送されてきた。このハガキには、希望に沿うようにとの符箋がついてきた。手紙の内容は、夏休みの宿題として、1億年前の化石アンモナイトの研究をしたいので送ってほしいとのこと。

私の所属していた炭鉱の地質調査所は明治30年代の開設で、露頭調査に伴って採取された化石が豊富で、北海道巡検の一つに数えられていたため、毎夏、内外の研究者の来訪がたえず、この小学生もどこかで話を聞いて、化石はいくらでも送ってくれると考えての申込のようだが、会社の化石標本は、ほとんど大学研究者の鑑定ラベル付

で登録されているため、既存のものを送ることができず、次の日曜日、白亜紀の露頭付近より採取し、送ることになり、ルートマップの化石多産地を見当つけて、腰弁で、熊のあまり出そうもない、人里に比較的近いところを選んで、初めて、仕事以外で化石採取に出かけた。

一般に地質調査時は、露頭以外の川原に化石が転がっていても産地不明として、蹴飛ばし、時に完全無欠な化石が転がっていると博物館の標本用あるいは、来訪者に寄贈するのが通例で、上野の科学博物館に展示してある巨大アンモナイトの1つは、入社直後に川原から数人でかつぎあげ寄贈したものである。しかし、ルートマップには、転石中に化石多との記載がされているため、事前に見当をつけて出かけることができるので、間違いをしないかぎり、お客さんを初めてのところへ案内しても収穫が期待でき大変喜ばれた。

未だ、アンモナイトがブームになっていなかったが、当時、銀行融資団、石炭合理化事業団の土産として、あるいは、叙勲の記念品として、大型のアンモナイト（30cm位）を贈っていた。これらのアンモナイト

は、地元で大学の先生の化石採取の案内役を長年している炭坑夫から分けてもらうことになり、その謝礼として、新入社員の3月分の給料相当が支払われていたが、当時は、誰も気に止めていなかった。

広島の子供のこの1枚のハガキがアンモナイト化石に対する関心をよぶきっかけとなった。確かに、昔のルートマップの記載は正確で子供を満足させるだけの収穫が得られた。

さて、荷造りにあたり、学名の同定で喧々ごうごう、新種のような。場所はどこだ、他にも新種があったのではないか、来週もう一度さがしてみるべきだ、ということで、最初は職場の仲間と、その友達と、通りがかりの不思議そうに眺めていた人が翌週にはハンマー片手に仲間入りと次第に輪が広がりブームとなっていった。昭和40年代は雪解けから初雪まで天気の良い日曜日は、すべてアンモナイト採取に振り向けられることになった。

このブームは大学の研究者を嘆かせる結果になり、また、営林署からは河川を荒らすと云うことで無届入林者の所持品を没収と云う事態になり、涙をのむ者が多かった。幸いなことに札幌営林局の機関誌への寄稿文（アンモナイト中心の地質論文）の校正を九州大学の教授の代行として依頼を受け、お手伝いをしたため、管内フリーパスをいただき、いかなるサンプルも没収からのが

れられるため、常に同行希望者が多かった。

化石の採取依頼は、広島の小学生の翌年から毎年1〜2件ほど届くようになったが、趣味の収集も本格化しだしていたため、数個と云わず、大小とり混ぜ、40〜50個、送付できる位、手元にアンモナイトが集まりだしていた。初期の頃は、形態がほぼ円形に近いものを良としていたため、多少欠けたもの、クリーニングの難しいものは、子供たちへの送付用として、同僚からも提供を受けていたが、昭和50年頃になると、岐阜県の小学校の同クラスの20人位から一度に、ハガキが来るようになり、対応ができなくなった。

化石の宝庫

化石類は一般に堆積岩の層理面に点在あるいは密集しているが、北海道におけるアンモナイトは、泥岩あるいは砂岩中よりも、アンモナイトを核としたノジュール（泥灰岩団球）中に包含されているため風化をうけることもなく、約6千万年〜1億年以上の時代を保存されてきた。

従って、白亜紀の露頭が発達する河川の川原には、アンモナイトブームになる前は、化石が顔を覗かせた転石がゴロゴロしていた。最初のうちは、片手ハンマーで人頭大の転石を破碎し、アンモナイトを取り出していたが、次第に、重装備になり、6〜10ポンドの大ハンマーに、かなてこ、タガネ

持参、1日がかかりで、径1 m以上の転石に顔をのぞかせているアンモナイトに楔を打ち込む熱中ぶりであった。

次第に、興味をもつ人口が増えるにしたがい、より遠くへ、車の入れないところへ、林道のないところへ出かけるが、昭和50年代にはいると、収穫は、山菜のみという日曜日が何度かあった。

アンモナイトの転石が、白亜紀の分布川原になくなってくると、水深があり、流速の早い川底を水中メガネを用意して掘り起こす者が現れた。アンモナイト採りも10年選手になると、川底の転石を水中より持ち上げなくても、地下タビの指先でなぞるだけで、転石の質（変成岩類……赤・青・黒・緑・白色を呈する転石とアンモナイトを含むノジュール）を判別できるようになった。アンモナイト採りと、水石愛好者とよく沢のなかで口論しているので出会すことがあった。このアンモナイトを含むノジュールは、亀甲石模様に風化することがあるため、鑑賞の違いで、1つの石にたいする扱いが大きく違っていた。

夕張山地は豪雪地帯で年間平均降雪量は約16mに達するため、融雪時、降雨が続くと雪崩に伴う斜面の崩壊あるいは、土石流の発生がしばしばあり、川原の様相が一変することが多く、春先、誰が最初にハンマーをふるうことができるかで、収穫に大きな差ができた。

特に、豪雨などにより、土石流が発生した直後は（200m位の直線的な沢で発生した土石流は沢口において対岸への激突は、7 mの高さに及ぶことがあり、新鮮な玉石だらけで、この沢をニコニコ沢と命名された）、笑いが止まらないほどで、ルートマップに勝手な沢の名前が多いが、中には、人を寄せつけない沢があり、熊の多い熊の沢である。恐る恐る何人かで出かけるが砂地に30cm以上の足跡が残っていたりして、ついに沢奥へ入ることができなかった。

このブームの時期に鉄道が夕張山地（石勝線）をトンネルの連続工事で横断したため、トンネルの捨石場が臨時の宝庫となった。ダンプの運ちゃんに怒鳴られながらノジュールに飛びついた。この資料は産地がハッキリしているため時代の決定に大いに役だったが、新鮮岩のため、化石面と岩片とが分離しにくく、アンモナイトを取り出すのに苦勞し、未だ、クリーニングが途中で物置の中に放置されたままである。

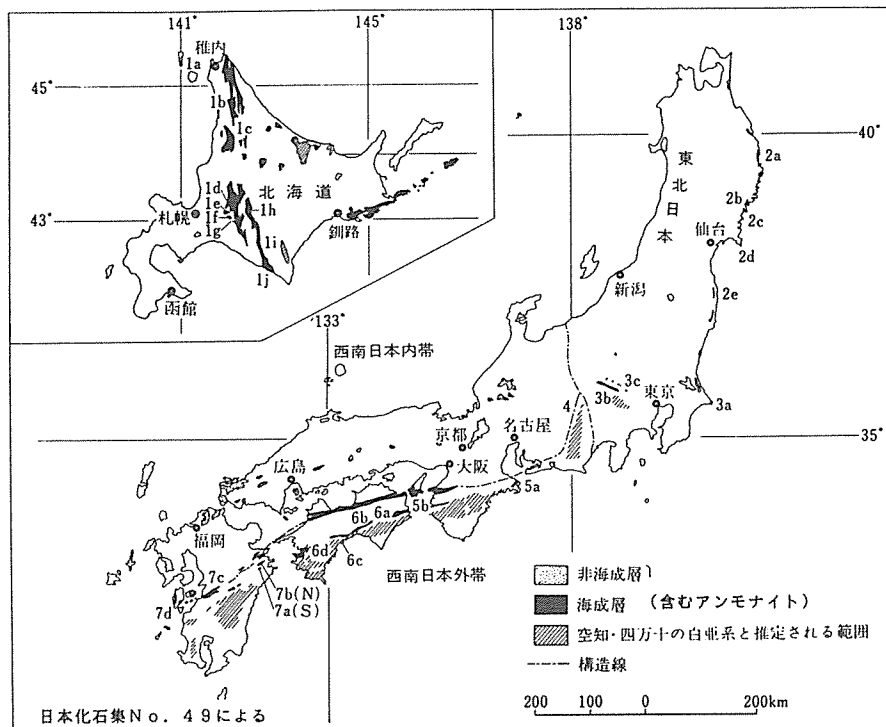
アンモナイトを包含するノジュールを見つけると余分な岩片を叩きとり、リュックに入れるが、背負って歩くと沢登りができないため、帰りの下りに、新聞紙にくるみながら集めていくのが、化石集めの常道であったが、ブームになると、悪いのがいて、集めていたアンモナイトをお先に失敬していく者が出沒してきたため、見つけたものを岸の草原に隠したりしたが、つい集め忘

れ、翌年の春先、見覚えのある岩塊を見つけたこともある。

今後は、高速自動車道が、夕張山地を横断するときが、再びブームが来ると考えら

れ、多数の新種の発掘が期待される。転勤あるいは、応援等で調査の機会がありましたら、ご希望の方へ資料を提供します。

日本の白亜系分布図



1：北海道（1a：札幌、1b：天塩、1c：苫小牧一幌加内、1d：釧路別、1e：万字、1f：夕張、1g：大夕張、1h：富良野、1i：日高、1j：浦河） 2：北上一阿武隈（2a：宮古、2b：大船渡、2c：大島、2d：牡鹿、2e：相馬） 3：関東（3a：銚子、3b：山中、3c：高麗） 4：赤石（戸台、水窪） 5：近畿（5a：志摩、5b：湯浅） 6：四国（6a：勝浦川一那賀川、6b：物部川一高知、6c：四万十、6d：広見） 7：南九州（7a：山部、7b：飯橋山、7c：八代、7d：天草）

我が家の宝

趣味のコレクションの評価・価値観となると、それを見る人によって、月とスッポン位の差があるとよく云われ、酒席で初対面の人と時には、意気投合することができ、のも趣味をとうしての場合が多い。

手元に、クリーニングが完全に終わった、

アンモナイトが、約50種、200個以上（大：約50cm、小：2～3mm）が、化石棚に雑然と並んでいる。アンモナイトはイカ・タコの仲間、で頭足類に属し大半が巻き貝のように平巻きであるが絶滅寸前に進化の極致に達し形状が異常な進化を示し、巻がほどけて写真に示すようにΩ状を呈しながら成長

していった、アンモナイトがあり、学名を Nipponites mirabilis YABEと云うアンモナイトがある。地質家で動物化石を専攻した人は別として、これは変わった化石だという人は10人に1人位である。

石炭業界が現在のように斜陽になる前は、海外から層位学・古生物学の大学教授が巡検でよく来訪をみた。その折、閲覧化石の一つとして、ニッポニテスを見せたところ、大学の博物館標本として、10万ドル（レート360円の頃）で購入したいと云われ、以後、同好者から垂涎の的となり、この一個の化石がもとで突然の来訪者に驚かされることが度々あり、それが縁で種々の情報を提供されコレクションの充実に大いに役だった。

アンモナイト・コレクターの最終目標は、

ニッポニテス（大学・博物館・コレクターの手元に、僅か50個程しかなく、現在のところ、私の化石が、保存状態・クリーニングの工合等で、トップとの評価を受けている）をコレクションに加えることと、超大型（国内の最大は径：約120cm）か、新属・新種を掘り出すことが夢である。

アンモナイトとは、邦名を菊石といい、この地球上に約4億年前のデボン紀の初期に出現し、中生代に入って全盛を極めたが白亜紀とともに、6千万年前に絶滅した。

現棲でアンモナイトの近縁な頭足類としては、南太平洋に生息するオームガイが最も近く、貝殻の退化したイカ、タコ等も仲間といえる。

（川崎地質株式会社）



異常巻 ニッポニテス

写 真 説 明



最もポピュラーなゴードリセラス



メソプゾシア



現棲オームガイ



オームガイの切断面



5～10cm位のアンモナイトの密集



国際会議の巡検の際の研究者